

# 琉球大学学術リポジトリ

## 琉球の古文書にみられる祭祀植物ダシチャクギとアザカガネ

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農学部 公開日: 2023-05-08 キーワード (Ja): シマミサオノキ, ナガミボチヨウジ, 杖, 古語, 琉球国文書 キーワード (En): <i>Randia canthioides</i> Champ.ex Benth., <i>Psychotria manillensis</i> Bartl.ex DC., Stick, Archaic words, Ryukyu Kingdom documents 作成者: 新里, 孝和, Chen, Bixia メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002019768">https://doi.org/10.24564/0002019768</a>

## 琉球の古文書にみられる祭祀植物ダシチャクギとアザカガネ

新里孝和<sup>1\*</sup>、陳 碧霞<sup>2</sup><sup>1</sup>国頭村文化財保存調査委員会、<sup>2</sup>琉球大学農学部亜熱帯地域農学科

The ritual plants recorded in ancient documents of Ryukyu, dialect names of Dashicha-Kugi and Azaka-Gane

Takakazu SHINZATO<sup>1\*</sup>, Bixia CHEN<sup>2</sup><sup>1</sup>Kunigami Village Cultural Properties Preservation Survey Committee, <sup>2</sup>Department of Subtropical Agro-Production Sciences, Faculty of Agriculture, University of the Ryukyus

キーワード: シマミサオノキ、ナガミボチョウジ、杖、古語、琉球国文書

Keywords: *Randia canthioides* Champ.ex Benth., *Psychotria manillensis* Bartl.ex DC., Stick, Archaic words, Ryukyu Kingdom documents

\*Corresponding author (E-mail: shinri.takakazu@gmail.com)

## ダシチャクギとアザカガネの記

伊波<sup>1)</sup>は1905(明治38)年、了攬新森城碑文のダシチャクギ・アザカガネに初めて解釈を与え堅い釘・固い鉄の意とした。次に東恩納<sup>2)</sup>は、ダシチャクギをダシチャの楚(にんじん木)に類する堅韌な木でアザカガネを鋌の事とし、ダシチャを植物とみた。さらに仲原<sup>3)</sup>は2句とも植物とみて、アザカがリュウキュウアオキ(ボチョウジ)、ガネがゲーン→グシチ→ススキで、アザカガネはリュウキュウアオキとススキの束、またクジ(クヂ)が方言名クジと呼ぶトウツルモドキで、ダシチャクギはダシチャの木とトウツルモドキを束ねたものと想定した。

また仲原<sup>4)</sup>は、全集第二巻「真珠湊碑文について」(『沖縄文化』第五号 1961年)にダシチャはシマミサオノキと称する灌木で、杖に珍重し魔除けになると記した。しかし、仲原はアザカのリュウキュウアオキはきわめて念入りに考究しているものの、ダシチャをシマミサオノキに辿った経緯は明瞭でないように思われる。

多和田<sup>5)</sup>は、アザカという特定の植物や祭具はない、リュウキュウアオキ(ボチョウジ)・ナガミボチョウジの十字対生葉序、ススキのサン・ゲーン、またダシチャはシマミサオノキとあり、ダシチャクギはそれを十字形に結んだものか明確でないが、要はアザカガネもダシチャクギも二つに分離するものではなく、十字形のもの・十字に結んだものは全てアザカであると結語している。

本論は前論まで、アザカもダシチャも2種の植物ではなく祭祀植物ススキを十字形に結んだものであろうと論を進めてきたが、古文書にみるアザカガネとダシチャクギは先達が考察を重ねて追跡したように、強韌な祭具であることに揺るぎはないであろう。クギとガネは、おそらくその語感からくる解釈ではないかと思われるが、伊波<sup>1)</sup>は釘・鉄、東恩納<sup>2)</sup>は鋌、仲原<sup>3)</sup>は2種の植物の束、多和田<sup>5)</sup>は一つの祭具アザカとした。4先達の解釈は表現上異なるもののようにあるが、神や厄除けの拝みの固い・強韌な祭具としての信仰に結びついたものに統一され、共通する内容と考えられる。

ダシチャクギとアザカガネの語は、琉球の信仰で重要な祭具に位置づけられると考えられ、国家事業の眞玉湊や了攬新森城の碑文に刻まれ、『おもろさうし』に記される。この二語が別物で重要な祭祀植物であるとすると、なぜ、国家祭祀のイザイホーにはアザカ(ナガミボチョウジ)1種の葉が用いられ<sup>6,7)</sup>、国家文書の一つである袋中の『琉球神道記』<sup>8)</sup>にはダシチャ1種だけが記述されているのか、疑義が生じる。

今一度、『おもろさうし』第13「しよりゑとの節」763(外間<sup>9)</sup>)を読むと、「天統の御想ぜ 大君は 崇べて 屋良座杜 石ら子は おり上げて 十百末 精戦 寄せるまじ 又王にせの御このみ 精高子は 宣立て 八重座杜 眞石ら子は 積み上げて 十百末 又聞ゑ天統の 世の想ぜ 召しよわちへ 奥の藩 石ら子は おり

上げて 十百末 鳴響む王にせの 世の想ぜ 召しよわちへ 奥の海の 眞石ら子は 積み上げて 十百末 又聞得大君ぎや 屋良座杜 ちよわちへ だしきや釘 差しよわちへ 十百末 又鳴響む精高子が 八重座杜 ちよわちへ あざか がね 留めば 十百末」がある。そのオモロの外間訳は「尚清王様、国王様の御叡慮で、聞得大君、精高子を崇めてお祈りをして、屋良座森、八重座森に石を、石垣を積み上げて、千年も末永く敵の軍勢を寄せるまい。名高く鳴り轟く尚清王様、国王様が、国事についてのお考えをなさいまして、沖の藩、沖の海に石を、石垣を積み上げて、千年も末永く敵の軍勢を寄せるまい。聞得大君、鳴響む精高子が、屋良座森、八重座森に来給いて、霊力のある聖木、ダシチャ(聖木)で作った釘を刺し給いて、アザカ(琉球青木の古名)やゲーン(すすき)を土地鎮めのために刺して留めたからには、千年も末長く敵の軍勢を寄せるまい。」とあり、同書(上)<sup>10)</sup>第1・17の脚注では「だしきや;木の名。シマミサオの木。ダシチャで作られたダシカグサン(杖)は、魔除けに使われる。」とある(文中の\_\_\_\_\_はいずれも筆者)。

しかし、『琉球神道記』「一 キンマモン之事」<sup>8)</sup>には、「昔、この国のはじめ、まだ人のいない時に、天から男と女の二人が下りた。男をシネリキュ、女をアマミキュという。二人は小屋を並べて住んだ。この時、この島はなお小さくて、波に漂っていた。そこでダシカという木を現して、それが繁殖して山の形をつくった。次にシキュという草を繁茂させ、また阿壇という木を植えて、ようやく国の形とした。」とあり、アザカは記されていない。同書の原田校訂の注の概略を述べると、ダシカはアカネ科シマミサオノキで、材はきわめて固く、杖になる。聖木とされ、杖のダシカグサンは魔除けになる。ダシカ釘・ダシカ真弓の言葉もある。シキュはイネ科ススキの古語。『混効験集』に「みがん 御萱ミゲンなり。薄」とあり、神女の捕り物や占めに用いられ、阿壇はタコノキ科アダンで、材料の用途が広く、木は防風・防潮・防砂用に植えられる、とある。

前論<sup>11)</sup>で述べたように、袋中は東北の出身で沖縄には3年の滞在である。袋中は、亜熱帯沖縄の、その上首里から遠隔地にある北部の深山や久米島、遠く石垣、西表さらに与那国島の山地林に点在するシマミサオノキに触れる機会があったのだろうか、シマミサオノキを「山の体」にする樹種の発想には至らないのではないだろうか、と考えてしまう。

一方、琉球王国の杣山制度で中頭地方の杣山は王府の山奉行所が管轄し、管理主体は間切にあり、沖縄島の南端に位置する杣山が西原間切の「棚原山林」である<sup>12)</sup>。現在の琉球大学キャンパスの千原池周辺の杣山跡地の森には、山原の山地に分布するオキナワウラジロガシ、イジュ、シシアクチ、ボチョウジ、ギョクシンカ、ギーマ、リュウキュウチクなどが生育し、かつて市街化の以前にはイタジイ林もあったという<sup>13,14)</sup>。しかし、西原町の植物相の目録にはナガミボチョウジはあるが、シマミサオノキの記録はない。

棚原山は尚敬王の 18 世紀頃<sup>15)</sup>、首里王府に供するために茶樹を植栽し、杉、檜などを植えた。その頃、首里に近隣する棚原山は木材になる良木はほとんど伐採されていたという。ここでいう杉はコウヨウザン、檜はイヌマキである<sup>12)</sup>。

国頭村安波のウガン林は、東側の太平洋海岸から内陸へ約 500m 入った標高 20~50m ほどの自然林である。その森の海岸側の潮風の影響を受ける東斜面はアダン林であるが、背面側は小凹地のイタジイの優占林で、高木層には大きなオキナワウラジロガシ、ホルトノキがあり、他にモチノキ、イスノキ、タブノキなどが生育する山原の山地型の植生である。その山地型植生の低木層、草本層にボチョウジ(リュウキュウアオキ)が優占度・群度も高く、わずかながらシマミサオノキがみられる<sup>16)</sup>。シマミサオノキは、本部半島でも通常非石灰岩地の山地性の小高木であるが<sup>17)</sup>、本部町大堂のやや内陸の標高 65m にあるイタジイ群落(調査面積 400 m<sup>2</sup>)の低木層に出現 1 回の種で生育する<sup>18)</sup>。西原間切の棚原山その他の自然林は、近年の強度な伐採によってシマミサオノキが構成種から消失していったのだろうか。

沖縄のヤマ概念は、高い山に限らず、神が降臨し神の座す低地の御嶽もムイであり、ヤマである<sup>9)</sup>。森をなすヤマ、国頭村安波のウガン林や本部町大堂の非石灰岩地の低地林の例から、低地の凹地形を呈する棚原山は山原の山地型の植生をもち、シマミサオノキが生育する可能性がみえてきそうである。しかし、西原町の年中行事の祭祀植物にはシバサシのススキの他に記録がない<sup>15)</sup>。西原町でススキ(方言:グシチ)は、茎が大きくて太いものをゲーンといい屋根の組み合わせ骨材や家畜小屋に使い、またグシジャンと呼ぶサンを作るが、ボチョウジやナガミボチョウジ、その他の祭祀植物は記されていない。ナガミボチョウジ(方言:ドクギー)は毒の木として恐れられたらしい<sup>12)</sup>。

久高島イザイホーのようにナガミボチョウジがハブイにさすアザカとして、各地で魔除けとするシマミサオノキが神の拠りどころとするグサン(杖・棒)<sup>19)</sup>として、琉球王国の重要な祭祀植物ならば、生育地も生育数も多いボチョウジ属はよしとして、王府は生育地も生育数もきわめて少ないシマミサオノキを、イヌマキやスギ、クスノキ、オキナワウラジロガシ、イジュ、モッコクなどと同様に商用禁止木<sup>20)</sup>に指定しなかったのか、疑問が過る。

王府首里からもう一つ船で近いところにある久米島は、どの国、どの島とも交通のきく位置にあり、日本の各地、朝鮮、中国、沖縄に直通していて、奈良時代には朝廷の拝賀式にも参列していた<sup>21)</sup>。従って、首里王府の政策の要である祭政一致、すなわち古文書にみる国家祭祀の影響はかなり大きかったと思われる。伝承によると、神代の昔、三柱の女神がヤマトからオキナワに渡ってきて、そのうちの姉神は首里の弁の嶽に、妹神二人は久米島の東嶽と西嶽に住んだ、西嶽の妹神が久米島君南風の祖神である。

尚真王時代の久米島の役割は大きく、『おもろさうし』第 21 巻はすべて久米島のオモロで満たされている。久米中城間切(仲里間切)は尚円王の長男である尚真の領土で、琉球の第一黄金時代の建設に大きな力となった<sup>21)</sup>。その仲里間切の儀間・嘉手刈<sup>22)</sup>の旧暦五月稲穂祭(シツマ)の「道ウミ」には「あざか森なかい あざかばのみらば・・・」とうたい、ウミの浜辺の通り道があり、アザカ森を越えるとアーラ浜に出る(五月稲穂祭)。また旧暦六月の稲大祭には神女がタイワンカニクサ(ナガバカニクサ、方言名:ンガヤー)のカブイをして、その時に歌う「ウミ」に「・・・だしちやからむちえぎて・・・」とあるが、嘉手刈村落の約 168m の高所にラーサー山があり、ラシチャ木というシマミサオの木が群生している、という。

さらに、仲里間切嘉手刈イシキナハ御嶽でノロが集まり、「年の人」がススキとアザカの枝を束ねたゲーン(ン)でお祓いで儀式が始まる<sup>22)</sup>。その時のウミ(オタカベ)で「・・・あざかばぬ したによ オヘイヨオオオリ だしかよらむちえ へかえるよオヘイヨオオオリ・・・」と歌う。このオタカベは『おもろさうし』第 21 巻にはない。しかし、旧仲里村の年中行事で、5月稲穂祭(シツマ、ツマ)は

稲穂3本ずつ束にして飾り、6月稲大祭は最高女神君南風がヤブランのカブイを頭に冠し、8月柴差し(カシチー)はススキ 3 本と桑の枝をゲーンにして差すのだが、嘉手刈イシキナハ御嶽のオタカベでアザカを用いる他に祭祀植物にダシチャはみえない。

多和田<sup>3)</sup>(「古琉球の祭具」)は、渡嘉敷島と座間味村での聞き取りからアザカとゲーンは一つであるとしている。久米島の方言でナガミボチョウジはポッポイギ・ムムギヌホターと記録されているので<sup>23)</sup>、これがアザカと同一ではないことを示している。また同記録でアザカと呼ぶ植物は見あたらない。

久米島の代表的な森林植生にスダジイ(イタジイ)群落が、宇江城岳、山里一仲地部落、阿良岳にみられる<sup>24)</sup>。いずれの森林も高木層(6~10m)の植被率が高く、シマミサオノキは山里と仲地のスダジイ群落の低木層に出現し、優占度・群度が+~2.2 と比較的高い場所がある。

久米島は日本、中国、韓国などと首里を結ぶ重要な位置にあり<sup>21)</sup>、三山時代や琉球王朝時代から進貢船が往来するなど交通の要路で中国や南方諸国と独自の交易もあつたとみられる<sup>25)</sup>。また高級神女の君南風が置かれるなど、祭祀においても首里王府と深い関係があり、『おもろさうし』にも収録されるように重要な神事は国家祭祀に因んで儀式が行われたと思われる。久米島は国家祭祀の影響はきわめて高かったと思われ、その痕跡に祭祀植物のアザカとダシキヤが神歌や地名のラーサーヤー(ラーサーはラシチャ=シマミサオノキ)、ラシチャー山、アザカー・アザカームイ(琉球青木のこたか)などにみられる<sup>26)</sup>。

## ダシキヤクギとアザカガネは 対語・対句か

蔡温の著した林政八書の『山林真秘』は、仲間<sup>20)</sup>の推測からすると 1737 年以前に、尚敬王時代の文書と考えられる。つまり、西原間切辺りの山野には良材がなく、杣山地帯の棚原山に茶樹、コウヨウザン(杉)、イヌマキ(檜)などが植えられた頃である。『山林真秘』には魚鱗形の育林方法があり、その育林法とはススキとチガヤの原野に魚鱗状の伐り開いた穴を設け、その穴の空地に有用な樹種を仕立てるやり方である。同書の『樹木播種方法』によると、穴の広さはススキの高さの約 5 倍とし、育林地の全景が魚鱗状に配置され、ススキによる防風効果を発揮し風水の蔵風理論を求め琉球独自の育林法であるとされる<sup>20)</sup>。王府はヤマの荒廃と欠乏する良材を得るのに、高度な育林技術と甚大な人力を注ぐ政策を施行していたと考えられる。ススキは、台風と旱魃の常襲地帯で過伐によって逼迫している沖縄中南部の林地の造林事業にも有益な抱護垣の機能を担っていたといえよう。

首里王国時代は、その以前からおそらく民人の家屋は穴屋あるいは質素な茅葺きで、武家家屋も茅が使われていたと想像される。茅つまりススキは、山野の木材が欠乏する中で、家屋の大方の材料として、薪燃料材として、敷き草などの農業用を含め、日常生活に大量に消費されていたと思われる。いわゆる、かまどの火のものと代表的役割を担っているといえよう。

植生遷移からみるとススキは<sup>27)</sup>、先駆植物で山崩れなどの裸地や山地や放棄畑地などの荒廃地、伐採地にいち早く風散布型のススキの種子が飛来して繁茂する、いわゆるカヤモーと称するススキ草原となる。またススキは株状の多年草であるが、北方の暖温帯の寒いところではその地上部は冬になると褐色になり、東北地方一北海道では枯れてしまう。沖縄では常緑性となり刈り取っても早期に萌芽して再生する<sup>27)</sup>。亜熱帯地沖縄のススキは、痩せ地にも生え、草原となって繁茂し、常緑性で再生力が高く、窮乏する琉球の民人にとっては日常生活の手元植物で真に守護的存在であったと思料される。

袋中の琉球滞在の 17 世紀初頭は、『おもろさうし』第一巻が編集(1531 年)されてから 1 世紀近い年月になり、残る全巻の編集も

進んでいた時代であろう。1609年島津の琉球入り前の当時の情勢からすると、琉球王府の要人である袋中には、王府の中央集権、祭政一致の体制の最たるものである『おもろさうし』の内容は十分に把握されていたと推察される。植物利用に対する当時の琉球の民人の生活、林野の状況、王府の政策の状況下で、主要な祭祀植物あるいは祭具と考えられる“アザカとダシキヤ”が、袋中の琉球王国の神道である『琉球神道記』の中の「キンマモンの事」<sup>9)</sup>では、アザカはなく“ダシカという木”のみが記述されている。推し測るに、アザカとダシキヤは別個ではなく一つのものであることが、当時の王府役職人にも広く認識されていたに違いない。

オモロの祭祀植物の代表とするダシキヤが“ダシカの木”となっているとすると、きわめて短期3年間の滞在の浅い経験のもと、話言葉や文書表現が異なる琉球の習俗の中で、山原の山林に少数個体が点在し、沖縄島中南部では杖に使用しなかったと思われるシマミサオノキを、東北地方出身の袋中が「山の体」とする木を神聖なダシカの木にあてる思索へたどり着くことはなかったであろう。さらに、『おもろさうし』は神歌の一種の宣立言で、対語、対句、折り返し、慣用的美称辞が多い<sup>9)</sup>とされるが、袋中の『キンマモンの事』は神道の著作であり、宣立言のように折り返しや美称辞を述べる必要がなかったと考えられる。『キンマモンの事』の文章の祭祀植物では、あるいは東北語と琉球語の混同によってダシキヤが“ダシカの木”と著されたとも考えられないか。

悪魔退散の祈祷に、ダシカ・クディ(ダシカ木で作ったクギ)を門に吊るすや那国島も、ダシカ木をグサン(杖)に使うが釘にする口碑はないという<sup>28)</sup>。祭祀植物を神聖なところに据える時、それを“さす”“立てる”“打つ”“突く”“打ち込む”などの言葉の表現が、魔除け・厄除けや神意を留めるために、了攬新森城碑文や『おもろさうし』ではクギ・ガネの堅い意の接尾辞に転化し、あるいは仲原<sup>4)</sup>が『琉歌』の「北谷もしがね」の“かね”を美称とするように、袋中は接尾辞・美称としてクギ・ガネを省いた、とも推察されよう。したがって、“ダシカの木”の意は植物学上の木本種ではなく、袋中が琉球圏の身のまわりに繁茂して“ヤマ”と為すのは、王府時代の山野の状況やススキを多用した民人の暮らし、土着信仰、ススキの生態生理上から、ススキを表現したのではないかと総合的考察にたどり着きそうである。

仏教の根本主張の1つに諸行無常の仏語がある、万物は常に変化し生滅して、永久不変のものはないということである<sup>29)</sup>。浄土宗の袋中がススキの生態生理をどこまで解していたか知る由はないが、植物の生態遷移から観ると、「ヤマの体・態」としたダシカ＝ススキは道理に適っていると考えられる。植生遷移から、前述したように沖縄でもススキはごく初期に発生するパイオニア種(先駆植物)である<sup>30)</sup>。シネリキュとアマミキュの2人が下りた島の、無植生のその地に天はダシカ＝ススキをさし与えた。それはやがて花穂を開いて実を結び、いく数にも殖えて島のヤマの態を成してきた。ススキの群落はある年数、生滅をくり返して土に還り、いく年か経って養分の豊かな土になった島に次第にいろんな木が下りてくるようになり、木々の森を成し、地上の2人の暮らしに変化を与えた。維管束植物の中で他の草木が生え難い新たな土地に、ススキは天より授かりもので、地の生きものの変化・更新の始まりにあり、依代のもとをつくった。ススキはまさに、ヤマを創っていくのに相応しい役割を担う(図1)。ヤマを成した島には、いつしか海を漂うアダンの寄り物もやってきて、定着し、それが島の周りの形を落ち着かせた。

古文書と先達の研究内容から、ダシキヤクギとアザカガネの言語を再考してみると、仲原<sup>3)</sup>『アサカガネについて』(『琉球』1953)は、トウツルモドキを久米島ではクジ(おそらくクヂ)とよび、ダシチャクギのクギは釘ではなく、クヂの表記で、ダシチャの木とトウツルモドキを束にしたのがダシチャクギ(クヂ)、青木とススキを束ねたのがアサカガネではないか、と考えている。また『琉歌』(1959)<sup>4)</sup>では、琉歌『北谷まうし』の“もしがね”のカネは美称で、オモロは対語対句と折り返しを用い、古語を使う制約があるという。



図1 荒地に繁茂するススキ群落(中城村登又2021年11月5日)

金城<sup>19)</sup>『琉球新報』(1953)もまた、オモロ作詞の技法は対句の頻用があり、同じか似たものを対立させ、ダシチャクギとアザカガネも大方似た機能を持つものであろうとする。そして『説伝』と『旧記』から、ヤラザ森の築造工程で「聞得大君が右手にアザカガネ、左手に穂花のようにクギという植物をダシキヤに結びつけた杖をつき立てて、祭場の真中に立ち、ミセゼルを唱え、これに従う君々たちは大君を立ち囲んでこれに和してミセゼルを合掌した、と想像されます」と述べている。

さらに金城<sup>19)</sup>は、神霊のよりつく人間ヨリマシが手に持つものに幣があり、幣(ミテグラ・ヌサ・シデ・ニギテなど)は神霊の依代、神聖な樹木の分身をあらわし、その幣にあたる琉球の神女の持つ祭具がゲーンであるとする(『琉球新報』1953)。そして、ゲーンは神女の持つミテグラのケンが転訛したもので、ケン是一名カヤ(茅)と呼んで、これはススキのことであり、その花穂はヲバナ(尾花)といい、その美しさゆえに依代となり、やがて魔除けにも使われるようになってきた、とサン→ケン→ゲーン＝ススキへの経緯を示唆している。祭祀植物としてススキは優越するが、その生態的特徴の他に豊かな花穂の形は同じイネ科の実る稲穂に類似して、琉球の稲作民俗の豊作祈願に最たるものといえよう。

クギ・ガネの真義を確かめるには、これまでの研究をまとめて1. 堅い釘、2. 神聖な植物、とした場合の2点に絞り、さらに2. は2語を1) 異種とする、2 語を2) 同種とする、に分けて考究する必要がある。

#### 1. 堅い釘とした場合(伊波普猷<sup>1)</sup>)

『了攬新森城碑文』の解釈で、クギ＝釘、ガネ＝鉄、としたが、『あまみや考』(『日本文化の南漸』)の文中では、アザカとシヂョクは植物であり、神女が冠にするツルマキ(蔓巻、チヌマキ)は三味線蔓で「多分それはアザカで、シヂョクは恐らくフチマ即ち琉球アオキ、ボチョウジであろう」とする。この解釈からすると、クギ・ガネは神聖な植物につながり、金属製の釘・鉄の物質的な“堅い”は意味をなさなくなったようである。

#### 2. 神聖な植物とした場合(仲原善忠<sup>3,4)</sup>・金城朝永<sup>19)</sup>)

仲原<sup>4)</sup>は『真珠湊碑文について』(1961年『沖縄文化』第5号)で、ダシキヤはシマミサオノキ、アサカは琉球青木(ボチョウジ)、カネはススキとする。金城<sup>19)</sup>『ゲーン(萱)とグーサン(杖)』(1953『琉球新報』)は、クギ・クジ・クージからダシキヤクギはダシチャとクージの2つを組み合わせたものと推量する。クージは仲原<sup>3)</sup>『アサカガネについて』(1953年『琉球』第8号)が唱えたようにシヂョク(山ショーガ)というトウツルモドキと考えたであろう。

##### 1) 2語を異種の植物とした場合

伊波<sup>1)</sup>、東恩納<sup>2)</sup>、仲原<sup>3,4)</sup>、金城<sup>19)</sup>、外間<sup>9,10)</sup>の先達たちはほぼ2種あるいは2物とし、他の多くの研究者を含めて、アサカ・アザ

カ・アザハはリュウキュウアオキ(ボチョウジ)、ダシキヤ・ダシチャはシマミサオノキとなっている。金城<sup>19)</sup>は、2種は大方似た機能を持つものであると想定する。

## 2) 2語を同種の植物とした場合

伊波<sup>31)</sup>は『御新下日記』から「アザカとシジョクとの、薄と共に神聖視されていた」と結語する。多和田<sup>5)</sup>『古琉球の祭具』(1963年)は、アザカ・アダハはボチョウジ属(リュウキュウアオキ、ナガミボチョウジ)、ダシチャはシマミサオノキとするが、もともとアザカという植物や祭具があったとは考えられないといい、金久<sup>32)</sup>の理論からススキを十字にあげたのがアザカで、ダシチャクギを十字にあげたらアザカガネになり、ダシチャクギとアザカガネは本質的には変わらない、と考えている(図2)。



図2 ススキのサン(津堅島 2013年2月22日、旧暦1月13日)

ダシチャクギとアザカガネの解釈の経緯からすると、いずれの語句も祭具に通じるものである。国家祭祀である久高島イザイホーで、神女のハブイ(トウツルモドキ)にさすナガミボチョウジをアダカと称し、この方言名が琉球のほぼ全域に流布したように、国家の威光の影響でダシチャとアザカの方言名がいろんな場面、国レベルだけでなく地域の祭事や拝所や樹種名などに及んだことが考えられる。例えば、名護市久志のあじやか山<sup>31)</sup>、久米島市仲里のアザカ森やラーサー山(ラーサー＝ラシチャ木＝シマミサオノキ)<sup>22,26)</sup>などがある。

これまでの調査からして、沖縄群島ではダシチャ＝杖＝シマミサオノキを祭具とする神事は記録がないように思われる。祭具のダシチャ棒は、古宇利島ウンジャミ<sup>33)</sup>の神人が持つ棒と久高島ソーレーガナシ(竿取神)の棒<sup>6)</sup>があるが、棒材は主として樫やイヌマキが用いられ、シマミサオノキの明確な証拠はない。さらに“クギ”の影響もみられ、おそらくクギ＝釘の解釈によって、うるま市平安座島の葬式のスーパーニーに用いる紐で結んだ釘<sup>34)</sup>、久高島の葬式のダーク(ダンチク)に打ち込む釘<sup>5)</sup>(多和田『ダシチャクギとその用途』1963)、久高島の麦の初穂儀礼の供え物に置くアマミダーク(ダンチク)の茎の先に刺した釘<sup>35)</sup>、などがある。聞き取りで、沖縄方言蒐集家仲本将成氏(昭和4年; 1929年生、那覇市泊崇元寺辺りの生活)は、子供同士喧嘩をして仲間割れをしたときに、互いの境界(屋敷境か)にアシバクジ(相手と遊ばないという意)という五寸釘を打って交際を拒んだらしい(これは分裂ではなく、互いに絆を深めるために逆の方法をとったとのこと)。クギとガネは硬く留めるものを通しての、信仰的“刺す”“打つ”“留める”の魔除・厄除・守護の霊力を籠めているような気がする。

さらに注目するのは、久高島の旧暦3月に行われる麦の収穫儀礼マッティ第1日目のアサガミである<sup>35)</sup>。初穂儀礼のマブッチは柔らかい粥状であるが、収穫儀礼のチチメーは麦を木臼でついて、固い飯状に炊いたものをザルにのせてソーキンバイまたジーンバイと称し、チチメーの膳に供える。チチメー膳のザルの中の堅い麦飯は、3～9枚のユーナ(オオハマボウ)の葉を被せ、その葉1枚1

枚にススキの茎を刺す。チチメーに、それを整えるようにユーナの葉を被せて主農作物の麦が、乱されることなく、厄がつかないように、安泰・豊作の意をこめて“留める”ようにススキの茎を刺す。要するに、これが神人や村落民また国家の祭祀におけるダシチャクギ・アザカガネの実態ではないかと考えられる。

推察の域を出ないが、ダシチャクギのクギは物理的なものではなく、金属製の釘の出現以前に“くぎをさす”“くぎをたてる”“くぎでとめる”などの言葉があり、辞書では上代(奈良時代およびそれ以前)にクギの意の[鎖]があり「門戸をとざし固めるため、さしておくもの。じょう。」また「【釘を打つ(さす)】違約のできぬように念をおす」とある<sup>36)</sup>。

沖縄では、12, 3世紀頃アジと呼ばれた族長的支配者が成長しつつあり、鉄の武器、農具・農具の活用で農村を支配していく<sup>37)</sup>。中城村渡口洞穴遺物で900年頃の鍛冶製錬用の鉄鉦や鉄滓が出土するので、これが琉球最古の鉄器製造遺跡と思われる、1200年頃になるとアジ(按司)によって日本から鉄器を盛んに輸入しその製法も盛んになり、浦添城や勝連城から角釘が多量に出土するという<sup>5)</sup>(多和田『琉球古代の鉄の輸入(その一)』1967年)。大宜味間切塩屋村には、「球陽」に鉄匠の小屋があり船を修造する際の鉄釘を造るために設けられたものであるという<sup>38)</sup>。

池原<sup>39)</sup>によると、14世紀、察度王(1372～1395)の頃から鉄塊をもたらす本土商人が多くなり、また中国、南方との貿易によって鉄類の伝来があり、尚巴志時代(1422～1439)には鉄の大量購入があつてから鉄製農具が使用されたが、鉄製農具は村に一括に与えられ、按司の保護管理下におかれ農民は木製農具を使っていたらしい。康熙6年(1666)鍛冶細工を1人ずつ間切におき、鉄製農具は地頭のもとに一括管理して農民はこれを借用していた。農具の改良が進められ、1859年越来間切では堅い土を耕す股鋤を考案し、熊手鋤ができた。宮古では鉄製農具の使用は13世紀中頃以後と考えられ、八重山では石器を用いていた時代に鉄器の鋤、鋏、鎌を薩州坊泊から買い求め、寛永9年(1633)牛力による犁で農耕することで能率増産が図られたという。しかし、明治26年(1893年)、八重山はまだ石器時代の遺風があり、黒島では棒の中間に雷斧石を挟んで薪を割り、全島民は水田を耕すのに木鋤を用いていたらしい<sup>40)</sup>。

15, 6世紀は社寺、仏閣の建設が盛んに行われ複雑な木工技術があつたが、一般民家では穴屋が大半を占めており、民家の外観は穴屋から貫屋、茅葺き、赤瓦葺き、と時代を追い、貫木屋は高度な継手仕口加工技術を必要とした<sup>41)</sup>。だが、穴屋は無論、貫木屋の建築に釘使用の記述はみられず、鉄釘はまだ植物材料建築の資材ではなかったと考えられる。王府の居城である、平成に復元された首里城の計画・設計の記録をみると<sup>42)</sup>、基本方針は1712年の再建、1925年の国宝指定の正殿の復元を原則とするもので、その正殿の木部構造の軸組の主な特徴は貫構造となっている。軸部や床板などの継手・仕口は木製の「だぼ」を打ち、その他瓦屋根の土居葺に竹およびステンレススクリュー釘と銅釘が使われているが、これは現在の空葺工法によるものである。壁板などは和釘の鉄製のL字釘を打って留めているという(新里隆一; 談)、これはおそらく浦添城や勝連城址から出土する角釘と同じようなものと思像される。

クギは、物と物を継ぎ合わせる具に使われるが、語句には人間および神との約束を守る・固めるの意味もあろう。金属製の釘は造船・修造に使われ按司の城に使われているが、その漢字や感覚や表現は建築用器材に一般的に用いられた後の時代のものではないだろうか。奄美群島と塩屋湾ウングミのアザハ・シキユなどからすると、ダシチャとアザカは対語で、クギ・ガネの語はその美称であり、それらは2種の植物ではなく、祭祀植物としての普遍的・総括的な名称で、機能的意義を深めることを示しているのではないだろうか。

従来の解釈ではダシチャとアザカはそれぞれシマミサオノキとボチョウジ属とされているが、それらは古くて広く祭具に用いられて

いるススキ＝アザカであり、ダシチャクギ・アザカガネは祭祀植物の代表種であるススキを地に立て・刺し、神の守護を願う信仰儀礼の神託の言葉としての対語であり、『おもろさうし』の「・だしきやくぎ さしよわちへ … あざかがね とどめば…」はその対句ではないか、と思量される。玉城<sup>43)</sup>は、了攬新森城碑文のミセルルは対語・対句を重ねて叙事を展開し、オモロは原則として二節に対応して展開し、節の末尾に 1 首のモチーフを反復しているとしている。従って、「だしきやくぎつゝさしよわちへ あざかがねとどめわちへ」は対句で、碑文では重ねて表し、オモロでは二節が対応してくり返し、節末に「十百末…」と反復して表現されている、と考えられる。

今一つ、ダシチャクギ・アザカガネのこれまでの信仰の経緯を窺うと、「クディ」や「ガネ」が樹木で作る杖の意<sup>19,44)</sup>につながるものとすれば、本来杖は物理的な人の体の支えや串のような魔除けや厄除けの呪具の他に、精神的な人の安身安心を講じるように堅い杖・棒を地に立てたり突いたりするものではないか、このような信仰の意義が内包するような気がする。

金城<sup>19)</sup>によると、『遺老説伝』に「右手持<sub>二</sub>藜羽<sub>一</sub>、而左手帯<sub>二</sub>一杖藜<sub>一</sub>」とあり、藜は植物のアカザで、藜杖すなわちアカザの茎で作った杖は中国では老人の間に賞用されていたらしい、という。これが中国名の藜科(アカザ科 *Chenopodiaceae*)の杖藜(*Chenopodium giganteum* D. Don)<sup>45)</sup>とすると、本種は一年生草本で高さ3mに達する栽培植物であるが、半野生状態で野原や道端に生える。杖の中国語読みは「zhàng」(ザン)、杖藜は「zhàng lí」(ザンリ)であるが、杖藜を杖にする記述はない。古代中国のザン(杖)の風潮およびザン(藜杖)のアカザとムジン(牡荊)のニンジンボクの杖の利用が、琉球のグーサン(杖)やダシチャ(シマミサオノキ)の実状、またダシチャクギ・アザカガネの語句に関係するかは明らかでない。

記紀の天地創造の神で<sup>46)</sup>、国常立尊の国は国土・大地、常立は恒久化・定立、すなわち「泥土のような土壌がやがて固まって大地となった」ということであり、神格の化成の発想を表しているという。また<sup>47)</sup>、土煮・沙土煮の「う」は泥、「ひじ」も「に」も土であるから、これは神格化であるとみる。古事記にある「角杖」「生杖」は角のようにしっかりした土留めの杖であり、「国土形成の過程が、葦の生えている湿地を固定する事であり、杖の働きがきわめて重要なことが、これによって理解される。」としている。仲原<sup>48)</sup>は(『両碑文中の難句について』1953)、杖は方言名グーサン、グサン、グサヌなどがあり、ダシチャクギが悪魔を祓う力があると信じられたのは何故かと述べているが、杖の霊力はこの記紀の国土形成過程における「杖」の神格化の発想も大きいだろう。おそらく袋中『琉球神道記』<sup>9)</sup>の「この島はなお小さく、波に漂っていた」情景とダシカで国のヤマの形をつくったのも同じような発想であろう。

柳田<sup>47)</sup>は、ツエの本来は榜示で、忌杖の霊境を点定するもので、いわゆる占有権の防護であった、と推論し得るとして、杖立・杖突という峠や阪の名も「境の木の所在で、外から来た者の杖を置く所は、即ち内に住する者の杖を刺した地であった。さうして人がその分界を神聖ならしむる為に、特に境の神を請じて御杖を刺したまわんことを求めたのも、最も自然なる信仰の応用と見ることが出来る。」と結んでいる。その論から推すと、言語として“杖をたてる”“杖を突く”は、上代の“くぎをうつ・さす”と同義か類似する、と考えられる。

奄美の田舎では<sup>32)</sup>、赤子が生まれると「イアンハツヤ」(い矢)と称する先の尖った棒切れを表戸口の上の軒に挿すが、「い矢」の“い”は「斎(い)」または「忌(い)」で、いみ清められた矢、神聖な矢を意味するであろうという。呪力的効果のあるものを「さす」(指・挿・刺)とか「あざへる」(十字に組む)というのは、その事物や対象、ならびに地域を聖別化し、邪神妖魔に対してタブー化されるものと信じられ、似たような語の「イグイ」は「斎杭」のなまりで、それは清められた杭、祭りに際して幣物を懸ける杭の意味に解せられるという。奄美や加計呂麻の来訪神儀礼のウムケとウホリのノロは<sup>48)</sup>、<sup>あたま</sup>頭<sup>ウチクイ</sup>に<sup>とり</sup>珍絹、<sup>おぼね</sup>鳥の<sup>しろぎめ</sup>尾羽、<sup>ドギン</sup>白絹の<sup>こん</sup>胴衣に<sup>しん</sup>紺の<sup>せかん</sup>シンセカンという<sup>はかま</sup>袴、<sup>くび</sup>首

に曲玉や連玉、金の髪さし、そして五色の杖をたずさえて現れたといい、また国頭村比地のウンジャミには、サスノロとビマノロがダシチャ真弓・桑木真弓をつくって儀式を行ったという。

矢は、浜比嘉島の土産をはじめ山原地域の各村落のシヌグ・ウンジャミ祭祀にみられる<sup>49)</sup>。また神人の手に持つ、国頭村安田の里地の木<sup>50,51)</sup>、同村奥のイヌガシ<sup>52)</sup>、伊平屋村のダンチク<sup>53)</sup>など、本部町瀬底の腰にさすハマイヌビワ<sup>54)</sup>や同町具志堅の襟にさすヤブニッケイ<sup>55)</sup>の小枝、あるいは国頭村安田シヌグのヤーハリコー「くさびうち」<sup>56)</sup>も大きな杭打ちを連想させる。杭一杖一棒一矢一神人が手にする小枝は、一連の神聖なる儀式の祭具となる気がしてくる。

ダシチャクギとアザカガネについて、ダシチャクギ・アザカガネは各語が分別してあるのではなく、それらは本来一連のものであるが、古文書の碑文やオモロに記されることによって、それぞれに意味があるように解釈されてきたのではないかと考えられる。すなわち、村落民が土着の拝みや魔除けなどの儀礼をおこなう時に、主として生活圏にヤマをなし有用で崇高なすがたのススキをサンゲンにして儀礼の場所に立てたあるいはさしていたものを、国家の祭政一致政策による祭祀の統一と普及を図るために祭具の名称に変化をきたしたのではないか、あるいは逆に、地域によってその地の所産である祭祀植物を固持した変化をきたす民俗事情を産出したのではないかと推察される。

## 杖とカンダシカ

宮良<sup>44)</sup>は、ダシチャクギはアダス木、すなわちオドス(威す)木という意味で、悪魔を威嚇し、怖じけさせて近づけない祓魔力の強大な木ということで、「大和の山伏が七節杖をグフ(ごほ)につき」云々の語りからダシチャ(杖)はすなわち木の名で、悪魔を祓う力が強いために杖に用い、この木の名が杖の意味にも用いられたとする。そして、宮良は岩崎卓爾(仙台出身・1896年石垣測候所に赴任し約30年間動植物、歴史、伝説などを調査<sup>57)</sup>)からダシチャの木の標準名はルリミノキと教えられる。八重山地方では方言名ダシチャは、1961年に仲原<sup>4)</sup>、1963年に多和田<sup>5)</sup>が記載しているシマミサオノキではなくルリミノキというものである。換言すると、八重山群島におけるダシチャ＝杖はルリミノキ、ルリミノキすなわちダシチャである、ということだろう。ただ岩崎<sup>58)</sup>は、自らの私見でアカマタ・クロマタは「身ハ毛皮ニ擬シ草ヤ茅ヲ纏ヒ、竹杖二本ヲ左右ニシ上下ニ振り拍子ヲ整ヘ歌ヒツ、…」と記述し、神人の杖は竹でルリミノキには触れていない。

ロシアの民俗学者ネフスキーの調査野帳『宮古方言ノート』<sup>59)</sup>には「dasik'agi」シマミサオの木、また[dašica: dasike:]とメモされているが、著書『宮古のフォークロア』<sup>60)</sup>の『25世の終わりのうた』では「gusangi:n ukaramaz-k'a dasik'agi:n ukaramaz-k'a」“ぐしやんぎーん うからまいきゃ だすいきやぎーん うからまいきゃ”を“長杖に よりかかるまで 支えに よりかかるまで”と訳している。ネフスキーは日本・琉球の民俗歴史の研究者との濃い交流があり、野帳で「dasik'agi」をシマミサオノキとメモしたのはおそらく何らかの傍証を得たのではないと思われる。本永の教示にみるように<sup>61)</sup>、ネフスキーは改めて、宮古現地の言葉に習い“ぐしやんぎーん”と“だすいきやぎーん”を対語として、“杖→支え”に訳したのではないかと、との想像を描かせる。

石垣長健(昭和26年;1951年生)は西表島で生まれ暮らしている植物研究家で、琉球大学熱帯生物圏研究センター・西表島研究所の専門技術職員の在職中にイノシシ猟や森林植物について調査した筆者の一人新里との共同研究者<sup>62,63,64)</sup>である。石垣の口頭説明(2021年5月)によると、西表島では、ススキは通常はユシキと呼び旧暦1月のタナドゥリ(種取祭)には新芽を花瓶に差してウガンジュ(御嶽)で拝み、またシパと呼んでサンと同じように魔除けに使い、シマミサオノキは方言名ダシカで、杖、茅葺き屋根の茅をおさえるチーブク、イノシシ猟のチボ(跳ね木)に使い、またボチョウジ属は葉が牛の舌に似ていることから方言名ウシノシタキといい、

これら2樹種は祭祀には使わないという。トウツルモドキは方言名クーチで、その茎を割いて中の髓を取ってから、茅葺屋根のリウキウチクを編むシノルや床の竹(カンザンチク)を編むのに使い、また雨乞い御願の時に干立区ではカンピレーに行き、神人の青年男性が体にそのトウツルモドキやナガバカニクサなどを巻き村落の御願所まで下りてきて拝むという。

石垣長健はさらに、ルリミノキ属(*Lasianthus*)の中のおオバルリミノキとタイワンルリミノキは方言名カンダシカと称し、カン<sup>65</sup>は神という意味で、カンダシカは神事の杖に使うと説明し、最近まで小浜島のアカマタ・クロマタの儀式にその木の杖を西表島で採取して島の人に渡したという。カンダシカ(オオバルリミノキ)の杖の大きさは親指より少し太く長さは1.5~2mくらい、神事に使う時の長さは当地で調整しているとのこと、開催年月には求めに応じて4~5本、少ないときは2~3本採取したという。八重山地域でカンは広く神の意で、カンヌマイ「kannumaai」; 神様、カンシユラシ「kansirasī」; 神のお知らせ(お告げ)などがある<sup>65)</sup>。

石垣島宮良のニロー神<sup>66)</sup>は世持神・アカマタ・クロマタとも称し、1771年(乾隆36・明和8)小浜島からの分祀であるという。ニロー神祭祀は収穫物への感謝儀礼フーバナアギ(穂花上げ)および予祝儀礼エンヌエーニガイである。ニロー神は神謡に合わせて手に持った棒を打ち鳴らし拍子をとりながら神舞をする、だが棒材についての記載はなく、トウツルモドキ、ダンチク、またシマミサオノキやルリミノキの姿もない。八重山地域のニロー神やアカマタ・クロマタの神人の手にする杖・棒の樹種についての記録は祭祀秘儀のため今もって未見で、カンダシカはオオバルリミノキとする石垣長健の語りはとても貴重なものである。なお、西表島ではダンチクはダードと呼んで、かつて神司が死亡すると野辺送りして他の神司が杖として使っていたが、現在は魔除けに用いられるという。

アカネ科のルリミノキ属は常緑低木性でボチョウジ属やシマミサオノキと同様に対生葉序をなす。琉球列島に分布するルリミノキ属6種2変種のうち八重山諸島には6種を産する<sup>67)</sup>。ニコゲルリミノキ(*L. bunzanensis* Shimizu)は山地性で西表島に分布、ケシンテンルリミノキ(*L. curtisii* King. & Gamble)は山地性で屋久島・奄美・徳之島・沖縄・石垣・西表、台湾、中国~インドに分布、タイワンルリミノキ(*L. cyanocarpus* Jack)は山地性で奄美(請島)・沖縄・久米・石垣・西表・与那国、台湾、南中国~インドに分布、タシロルリミノキ(*L. fordii* Hance)は山地性で屋久島・種子島・奄美・徳之島・沖永良部・沖縄・石垣・西表、台湾、南中国・フィリピンに分布、オオバルリミノキ(*L. trichophlebus* Hemsl. ex Forb. & Hemsl.)は低地から山地にかけて広く生育し琉球各島、台湾、フィリピンに分布、マルバルリミノキ(*L. wallichii*(Wight & Arn.) Wight.)は山地性で屋久島・奄美・徳之島・沖永良部・沖縄・伊平屋・久米・石垣・西表・与那国、台湾、フィリピンに分布する<sup>67)</sup>。

ルリミノキ属は、日常生活においては有用樹木の範ちゅうになく、琉球列島における各樹種の方言名は神事に用いる八重山地方に限られている<sup>68)</sup>。ルリミノキ属の方言名は八重山地方の他に記録はなく、それらの方言名は生活材料からくるものではなく杖の意のダシカ、つまり地域の祭祀に使う神(カン)の杖に因み、オオバルリミノキのカンダシカ(西表)・ミダシカ(与那国)、タイワンルリミノキのカンダシカ・カンダスケ(西表)・マヤダスケ(川平)、マルバルリミノキのマヤダスケ(川平)などがある。

オオバルリミノキとタイワンルリミノキの幹は神の杖の大きさになるのでカンダシカと呼んで祭祀に用いられ、マルバルリミノキやタシロルリミノキなどの幹は比較的多少分岐し矮性で杖にならず、しかも深山に生育するので、マヤダスケと称するのだろう。カンダシカと呼ぶタイワンルリミノキもやや深山性なので、山地から低地の最も身近に生育するオオバルリミノキが神の杖によく使われる由縁であろう。与那国の方言名ミダシカは“御ダシカ”ではないか、と思われる。石垣方言では<sup>65)</sup>、カン; 神、イン; 犬、マー; 真の・本当の、また魔・妖怪、マヤ; 猫、ミー; 見かけ・見た目、となる、命・運命・天

命またミシウ; 神酒、神に供えるときはミシャグである。

ルリミノキ属は、通常高さが1~1.5mくらいで、夏になると対生する葉序の葉腋に径5mmほどの球形のきれいな濃青色の果実をつける。「瑠璃実の木は果実の色をるりにたとえたもの」<sup>69)</sup>で、ルリは神事に用いられる瑠璃玉など青色系の霊力をもつ玉類にもつながりそうである(図3)。とくに、オオバルリミノキやタイワンルリミノキの幹や高さはルリミノキ属の他の樹種と比べて大きく、幹は高さ2m径2cmほどになり通直で強く、葉は長さ20cm以上で大きく林内で目立ち、対生葉序の性質とともに、神の杖・カンダシカにふさわしいものである(図4、5—各樹種の右側に立てた紅白色のポールの大きさ; 径3cm・紅白の各長さ20cm)。

これも推測の域を出ないが、ダシチャクギとアザカガネは神託の対語で、クギとガネは金属的な物ではなくそれぞれが美称で、それらの語句が植物性の杖<sup>19,44)</sup>につながるものとする、その杖の神霊や語意から歴史的に様々な祭祀植物が表出してきたものと考えられる。金城<sup>19)</sup>はダシチャクギを植物ダシチャ製のグーサン(杖)に結びつけ、宮良<sup>44)</sup>は沖縄のダシチャー八重山のダシチャーで作った魔除けの杖とする。また、杖はグーサンとして何かに当てて突くものではなく<sup>70)</sup>、池間島カウルガマのダティフ(ダンチク; 前述の瀬底島と同じ)、野原サティパロウのツツアギー(ヤブニッケイ<sup>68)</sup>; 前述の本部町具志堅と同じ)、来間島シナフキヤのススキ、新里の麦ブーイ・栗ブーイのグミモドキ、比嘉シナフキヤのマーニ(クロツグ)、多良間島スツブナカの細竹(棒)のように神女や婦人・長老たちが杖の代わりに手に持つものもある。また島尻のパーントウはリウキウガキの杖を手に持つという<sup>71)</sup>。

祭祀植物の態様は、首里王府の威光から遠隔の奄美群島と八重山群島で歴史的経緯が顕著にみられるようである。王府が国家祭祀場とした久高島でアザハと名称したボチョウジ属の方言名は、沖縄島北部の一部村落でアザマガなどと称されるが、ボチョウジをアザハと呼ぶ地方は奄美群島ではほとんど見られず、八重山群島では逆にボチョウジをインダスケなど偽の祭祀植物と称される。さらに、八重山地域ではダシカはおよそ3種に分類され、政権下で圧迫を受けた民人のおそらく秘められた王府への反発・反骨心として、植物方言名とくに祭政一致を進めていた祭祀植物に顕現したのではないかと捉えてみた。

沖縄・琉球王府の租税のなかの地租は、田畑別々にあり原則として定石を現物納付とし、慶長15年(1610年)の検知で地位に応ずる石高を配賦して総額を決定したが、宮古・八重山に対しては寛永13年(1636年)にその定石を廃して人頭配賦税とし、さらに万治2年(1659年)定額人頭税配賦税とした。人頭税配賦の滞納処分については、間切もしくは村においてその内法により財産の差押え、売却しても不足するときは親族、与または村、間切におよぼし皆納をはかった。人頭税の徴収は個人にとっても苛酷なものであったが、凶年や自然災害のために村全体が未進のときは貯穀から補充をさせるなど、惨酷な租税法であった。滞納が重なり、隣人や村に迷惑が掛かることを恐れ、夜逃げ逃亡する村落民も多かったようである(この段落は池原<sup>39)</sup>を参照した)。



図3 オオバルリモノノキの瑠璃色の果実 (国頭村与那2021年11月)



図4 オオバルリミノキの幹(ポール左側・太い幹2本)  
(国頭村与那 2021 年 11 月)



図5 タイワンリミノキの幹(ポール左側・直の紋のある幹)  
(国頭村与那 2021 年 11 月)



図6 シマミサオノキの幹(ポール左側・直の幹)  
(国頭村与那 2021 年 11 月)



図7 シマミサオノキの杖(杖長 140 cm)



図8 ポチョウジの樹形(名護市二見 2021 年 11 月)

シマミサオノキの幹は通直で、径、長さ、堅さも杖用に最適で、マードスケと称するように日常の身体の支えに最適である(図6、7)。ポチョウジ属(ポチョウジ、ナガミポチョウジ)の幹は、地際からほぼ叢生するものが多く、湾曲し、細く、堅さも十分でなく、インダスケと称するように杖には不向きである(図8)。ルリミノキ属 6 種のなかでオオバルリミノキ、タイワンルリミノキの幹はシマミサオノキと同じような形状・性質をもち(図4, 5)、また果実の性質も霊力がイメージされ(図3)、とくにオオバルリミノキは霊域の御嶽林にもよく生育してカンダシカの感を強く有し、人里の森にもよく見られるもので採集も容易である。

首里王府は 1768 年、アカマタ・クロマタ祭祀は「二人が異様ないでたちで神のまねなどをする。良くない風俗なので今後は止めること。」として禁止令が出された<sup>66)</sup>。王府のこの祭祀の廃止命令に対して、小浜島の元老格の祖先の人々が白装束に身をかため、「アカマター祭は部落信仰の全生命であるから、是非ともこの祭祀の禁を解いてください。もしもこれが解禁下さいませぬときには、お願いですからどうぞ私の首をはねて下さい。」と嘆願した、その結果、この神祭が復活したという<sup>72)</sup>。村落民は大切な神事の伝統を必死に守り、祖先から受け継いだ糸を断ち切らなかつた。その証は、ダスケやインダスケに変わる比較的身近な里山に生育する独自のカンダシカを維持してきたことにも表れているのではないかと思われる。新城島上地のウフプールは公開禁止の状況があり秘儀性があるが<sup>73)</sup>、八重山各島・各部落のアカマタ・クロマタ祭祀にも厳しい秘儀性がある。八重山群島の祭祀の秘儀性は、神への厳格な約束事もあるが、あるいはカンダスケ名のように、王府の激しい貢租や伝統祭祀への干渉に対する反発また役人の目を逃れる村落民の知恵があつたのではなからうか。

[八重山地域におけるダシキケー・ダスケの語意]

和名シマミサオノキ・・・ダスケ、マードスケ、

—————▶ 本当・真の杖

和名ポチョウジ・ナガミポチョウジ・・・インダスケ、ウシヌシタキ、ミズダスケー、

—————▶ 偽の杖

和名オオバルリミノキ・・・カンダシカ

—————▶ 神の杖



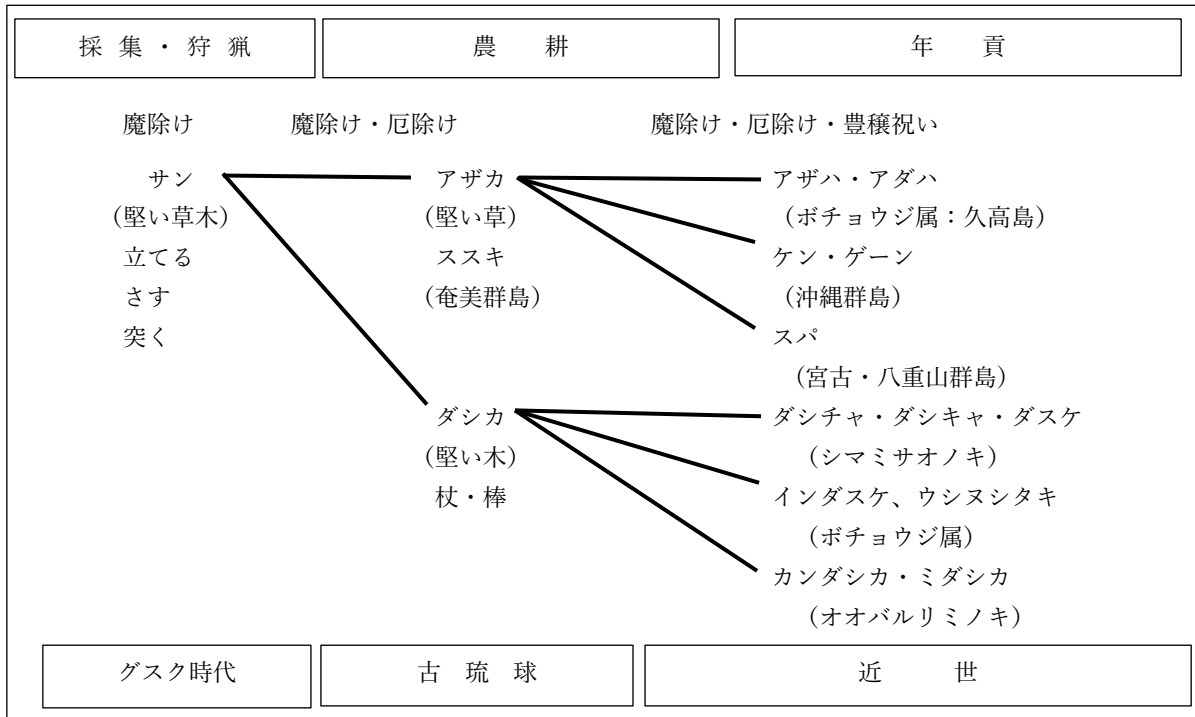


図 9 祭祀植物サンの名称と機能の遷移の考察

琉球の祭祀植物について感覚的であるが、生業区分(採取・狩猟、農耕、年貢)、機能(魔除け・厄除け・豊穰祝い)、植物名(サン、ダシカ、アザカ、ケン・ゲーン)、時代区分(グスク、古琉球、近世)を行い、これまでの調査報告を統括して図9のような歴史的流れにまとめてみた。改めて、祭祀植物の方言名は、生業や政策など、時代の変遷さらに地理・地域性とその民人気質によって変化してあろう。

琉球圏のうち、島津の琉球制圧の後、首里王府から早期に離れた奄美大島は「琉球の事物で、慶長以前のものであるか、それ以後のものであるかを判断するに、大体の目安になる、(中略)古い面影を多分に保存していた」<sup>31)</sup>とされるので、祭祀植物にとっても原語がほぼ維持され、また在王府の沖縄群島は日本や中国などの移入語の影響で多分に変化し、且つ遠隔の八重山群島は民人の心情も踏まえて多様化したと考えられる。

神事の儀式の大役を担う祭祀植物の一連の杭一杖一棒一矢一小枝は、来訪神・大工神の性格をもつ奄美と山原の家造りや船造りのときの杖、沖縄諸島のシヌグ・ウンジャミの棒・矢・小枝、そして宮古諸島のバートツや八重山諸島のアカマタ・クロマタおよびマユン・ガナシの神の杖、などに用いられる。それらの杭・杖由来の祭祀植物、国家祭祀のイザイホーはじめ各地方の主な神祭に神女が冠にするハブイ・カブイや祓いなどに用いる祭祀植物は、国家政策や他国の文化の影響を受けながら、各地方の自然と人文を通して、「ダシキヤ」「アザカ」の言葉を生み出し、拝礼の意思を伝える“立てる”“刺す”“打つ”“留める”などの仕草を「ダシキヤクギ」「アザカガネ」に籠めて、民俗の神儀式に登場したと推察される。

思うに、了攬新森城碑文や『おもろさうし』古文書の“くぎ”“かね”は、「支え」「守護する」の意味を成すもので、グサンの杖や棒は、儀式を総体的にアザカをもって表現されたものであろう。それを示す祭祀植物は基本的・一般的にススキであり、それをサン・ゲーンにしてグシキヤ、そしてアザハ・アダハとなり、それが各種の木の枝や茎葉になったり、草冠になったりする。ゲーンをダシキヤの杖・グサンにして手に持ち、地に立て・差して、神の支え・助力を得て国王また国家の周りを固め、またゲーンをアザカにして外力・魔を祓い国家を永遠に守護しそれを留め、霊力のある植物をハ

ブイにして神人は神と一体となって国土、村落を維持するように、天に神に拝礼するするのである。

概観すると、沖縄の祭具植物は各地方で異なり、ススキの他に身近に採取できるものをダシキヤ・アザカにして、「支え」「守護」する杖・棒(グサン)はイヌガシ、ヤブニッケイ、ハマイヌビワ、オオバルリミノキ、ダンチクなど、さらに神と一体となるハブイにはカニクサ類、ヤブラン、ゴンズイ、クスノハカエデ、ガジュマル、サンキライ類、イタジイ、シノキカズラ、クロツグ、トウツルモドキ、ボチョウジ属など神の使いの龍のすがたを思い、これら霊力のある植物でもって村落の各種祭祀の儀式が行われる。首里王府が国家祭祀や古文書にダシキヤの語を著し、アザカとしてナガミボチョウジを用いたことによって、ダシキヤの語は、本来ダシチャ・グサン(グーサン、グッサン)の貴重な材として各村落で使われ奥山に点在しているシマミサオノキに当てられ、神人の総体的なアザカ、神人の身にグサンやハブイそして地方の祭祀植物名に混乱が生じたのではないかと考えられる。

古文書にみる琉球国の祭祀植物は、本論の一連の考察でダシチャとアザカは神託に因む対語・対句とみられ基本はススキに帰するものであろうとされた<sup>61,74)</sup>。ススキすなわちアザカ・アザハは、琉球の祭祀植物の根幹をなすもので、ほぼすべての神事、行事、日常の魔除け・厄除けに用いられる。国策で登場したダシチャとアザカの名称は、国の権威と霊威が乗りうつり、地方の祭祀植物や呪物さらに植物名にも影響を及ぼしてきたと推測される。久米島のヤマの名称で、ラーサーヤー(ラシチャ(シマミサオ))の木のこと、アザカー・アザカームイ(琉球青木のことか)<sup>26)</sup>などにダシチャとアザカの痕跡をとどめる。

アザカをナガミボチョウジとした久高島イザイホーのハブイは、それを用いることがなくても語は塩屋湾ウンガミのようにノロの手に持つ祭祀植物の束に登場し、ダシチャのシマミサオノキはダシチャグサンとして棒の材料は違えども古宇利島ウンジャミの神女たちの儀式の大役を担う。2種の名称は、王府からの遠隔地である八重山群島でその真意が多様化し発展する。アザカのボチョウジ属はインダスケ・ミズダスケとなって祭祀植物から消え、ダシチャのシマミサオノキは真のダスケ・マダスケとなって生活の中でより貴重材となる。ダシチャのその名は、グサン・グーサン・杖の役目を担い、宮古諸島の池間島のダティフ(ダンチク)、来間島のスス

キ、比嘉のマーニ(クログ)などのように神女や婦人・長老たちが杖として手に持ち、八重山諸島ではカンダシカすなわち神の杖としてオオバルリミノキが「アカマタ・クロマタ」の神人の手にのり、大地につき立てられる、と思われる。与那国島では、シマミサオノキがダシカ・クディのアザカとなって魔除けの呪術具となる。ススキのアザカの名は、このように王府政策の影響でポチョウジ属に転用され、混迷のなかで祭祀植物に紛れ込み、大宜味村塩屋ウングミや栗国島ヤガン折目、久米島の稲大祭や地名など各地村落に表現されて、ついに八重山では祭事にススキ・スパが供えられ神の杖ダシカ・オオバルリミノキが展開されることになる。

王府の国家祭祀は、ススキを基に、奇しくも琉球の祭祀植物の独自性を高めて十字・アジマー・アザハの十字対生葉序の性質をもつアカネ科のポチョウジ属ナガミポチョウジを重く用い、民間祭祀のミサオノキ属シマミサオノキ、ルリミノキ属オオバルリミノキ、さらに次報に予定するマサキに結びついていく。おそらく、それはまた「まゆん・がなし」の神人の杖、ダティフ木のアデクにもつながると考えられる。これらの樹種は亜熱帯島嶼沖繩の植物相を特徴づけ、ポチョウジ属、ルリミノキ属は主として熱帯・亜熱帯地域に分布し<sup>9)</sup>、ナガミポチョウジはトカラ列島以南、オオバルリミノキは奄美大島以南、南九州以南に生育する。さらに自然分布域の広いススキが、日本の中では沖繩で常緑性となるのも生態生理的に大きな特徴を示しているといえよう。

総じて推察するに、沖繩の神祭・年中行事における祭祀植物は、ススキを中心にアザカと称して用いられていたが、第2尚氏王朝3代目尚真時代(1477年～1526年)の祭政一致政策および『おもろさうし』第1巻編集(1531年)後にその植物種や呼称などに大きな変化をもたらしたものであろう。琉球圏から薩摩に編入された奄美諸島ではアザカの言語が残存し、そのアザカは祭祀の祓いに用いられ、沖繩諸島ではススキの転訛と思われるグシキ・グシチャーがさらにケン・ゲーンとなり、八重山諸島のスパなど、神事のサン「眞珠湊碑」(『南島風土記—沖繩・奄美大島地名辞典—])と合わせてほぼ全ての行事に用いられてきた。祭祀植物アザカは、了攬新森城碑文と『おもろさうし』のダシキヤクギとアザカガネの対話になり、「ついでさよわちへ とどめわちへ」と“立てる、さす、留める”の意を籠めて対句をなして展開し、神霊をもって王を国を「十百末」まで守護する神女の“オモイ”の神託が、くり返しと反復・復唱によってしだいに高揚していく儀礼のすがたが想像される。

## 引用文献

- 1) 伊波普猷. 2017. 「琉球に於ける倭寇の史料」(『古琉球』(外間守善; 校訂))(第9刷). 株式会社岩波書店, 東京, pp.144-156.
- 2) 東恩納寛淳. 1964. 「眞珠湊碑」(『南島風土記—沖繩・奄美大島地名辞典—』)(初版 1950年). 沖繩郷土文化研究会, 沖繩, pp.285-287.
- 3) 仲原善忠. 1978. 「仲原善忠全集 第四巻 補遺篇」. 沖繩タイムス社, 沖繩, pp.394-406, 406-414.
- 4) 仲原善忠. 1977. 「仲原善忠全集 第二巻 文学篇」. 沖繩タイムス社, 沖繩, pp.28-54, 66-72, 164-178, 432-438, 498-504.
- 5) 多和田真淳. 1980. 「古希記念 多和田真淳選集(考古・民俗・歴史・工芸)篇, 二民俗篇」(古希記念多和田真淳選集刊行会(沖繩県立博物館気付)). pp.117-123. 「琉球古代の鉄の輸入(その一)『考古学ジャーナル』14, 1967年」, p.165-186. 「古琉球の祭具=アザカガネとダシチャクギ」(『沖繩タイムス』1963年11月3日～14日), p.187-198. 「はぶいの植物学」(『えとのす』第1号 1974年), 沖繩.
- 6) 新里孝和・陳碧霞・西銘政秀. 2020. 沖繩・久高島イザイホーの祭祀植物. 琉球大学農学部学術報告, 67: 7-13.
- 7) 新里孝和・陳碧霞・西銘政秀. 2020. 沖繩・久高島の祭祀植物の連関と歴史的意義. 琉球大学農学部学術報告, 67: 14-20.
- 8) 弁蓮社袋中・原田禹雄訳注. 2001. 「琉球神道記」. 榕樹書林, 沖繩, pp.236-403.
- 9) 外間守善. 2017. 「おもろさうし(下)」. 株式会社岩波書店, 東京, p.19.
- 10) 外間守善. 2017. 「おもろさうし(上)」. 株式会社岩波書店, 東京, pp.23-24.
- 11) 新里孝和・陳 碧霞. 2021. 「琉球の古文書にみられる祭祀植物ダシチャクギ」. 琉球大学農学部学術報告, 68. (投稿中)
- 12) 仲間勇栄. 2003. 「第1章 近世期の山の管理利用」(『西原町史 第7巻資料編6』). 西原町編集委員会, 沖繩, pp.163-169, 198, 213, 216.
- 13) 仲田栄二. 1989. 「第二節 植物」(『西原町史 第四巻資料編三』). 西原町役場, 沖繩, pp.36-72.
- 14) 新里孝和. 2004. 「宇地泊川の森林植生」(『琉球大学を含む水系・流域群における水環境の改善のための総合調査』研究報告書 2002年度～2004年度). 琉球大学大学教育研究重点化経費(地域貢献), 沖繩, pp.41-60.
- 15) 平良利夫. 1989. 「第二章 各村落の概観」(『西原町史 第四巻資料編三』). 西原町役場, 沖繩, pp.99-388.
- 16) 諸見里秀幸・新里孝和・仲間栄二・比嘉寿・玉城豊春・新里隆一・比嘉政樹・島本杯二. 1977. 「沖繩県の社寺林調査報告」(社寺林の研究・6(静岡・長野・広島・沖繩)). 社団法人土井林学振興会・緑地研究会, 東京, pp.196-199.
- 17) 伊波善勇・澤岬安喜・池原直樹. 1996. 「第2章 本部町の植物相」(『本部町動植物総合調査報告書 植物相』). 本部町教育委員会, 沖繩, pp.5-114.
- 18) 沖繩県文化環境部自然保護課. 2006. 「本部半島カルスト地形基本調査報告書」. 株式会社ブレック研究所, p.58.
- 19) 金城朝永. 1974. 「金城朝永全集 下巻 民俗・歴史篇」. 沖繩タイムス社, 沖繩, pp.252-278.
- 20) 仲間勇栄. 2017. 「蔡温と林政八書の世界」. 榕樹書林, 沖繩, pp.198-201.
- 21) 新屋敷幸繁. 1974. 「久米島の歴史と文化」(沖繩自然研究会調査報告第1号「久米島県立自然公園候補地学術調査報告」). 沖繩自然研究会, 沖繩, pp.99-106.
- 22) 仲里村史編集委員会. 2000. 「仲里村史 第六巻 資料編5 民俗」. 仲里村役場, 沖繩, pp.381-424, 547-566.
- 23) 初島住彦・天野鉄夫. 1974. 「久米島の植物」(沖繩自然研究会調査報告第1号「久米島県立自然公園候補地学術調査報告」). 沖繩自然研究会, 沖繩, pp.11-39.
- 24) 新納義馬・新城和治. 1974. 「久米島の植生」(沖繩自然研究会調査報告第1号「久米島県立自然公園候補地学術調査報告」). 沖繩自然研究会, 沖繩, pp.41-70(付表).
- 25) 謝名堂誌編集委員会. 2015. 「謝名堂誌」. 久米島町謝名堂, 沖繩, pp.419-420.
- 26) 仲村昌尚. 1992. 「久米島の地名と民俗」. 「久米島の地名と民俗」刊行委員会, 沖繩, pp.211, 291, 461-462.
- 27) 菅沼孝之. 1975. 「生物の世界 植物」. 文研の学習図鑑文研出版, 東京, pp.24, 136-137, 167, 170, 176, 178-179, 187, 197.
- 28) 池間栄三. 1972(初版 1957年). 「与那国の歴史」. 発行人: 池間苗子(与那国), 沖繩, p.48.
- 29) 林 大(監修). 1986. 「国語大辞典 言泉」(編集: 尚学図書). 株式会社小学館, 東京, p.1169.
- 30) 新里孝和. 2020. 「亜熱帯沖繩の木や森や里山」. 「亜熱帯沖繩の木や森や里山」, 出版刊行世話人会, 沖繩, p.35-50.
- 31) 伊波普猷. 1938. 「あまみや考」(『日本文化の南漸—をなり神の島続篇—』). (『伊波普猷全集 第五巻』1974年), 株式会社平凡社, 東京, pp.542-544.
- 32) 金久正. 1978. 「奄美に生きる日本古代文化・増補版」, 至言社, 東京, pp.73-227.
- 33) 新里孝和・芝正巳. 2019. 「沖繩, 古宇利島と塩屋湾のウンジャミの祭祀植物」. 琉球大学農学部学術報告, 66: 51-63.

- 34) 新里孝和・芝正巳.2018.「沖縄・うるま市 4 島の祭祀植物」.琉球大学農学部学術報告,65:147-158.
- 35) 比嘉康雄. 1993.「神々の原郷久高島 下巻」(株)第一書房,東京,pp.16-17,39-41.
- 36) 金田一京助(編者).1960.「辞海」,株式会社三省堂,東京,p.517.
- 37) 外間守善.1979.「おもろ概説」(外間守善・西郷信綱「日本思想体系 18 おもろさうし」)(第 6 刷),岩波書店,東京,p.530.
- 38) 竹内理三(編).1986.「角川日本地名大辞典 47 沖縄県」,株式会社角川書店,東京,p.384.
- 39) 池原真一.1979.「概説・沖縄農業史」,月刊沖縄社,沖縄,pp.61-64,88-89.
- 40) 笹森儀助・東 喜望(校注).1983.「南嶋探験2」,株式会社平凡社,東京,pp.64-66.
- 41) 福島駿介.2020.「第三節 住と暮らし」(『沖縄県史 各論編 第九巻 民俗』),沖縄県教育委員会,沖縄,pp.166-174.
- 42) 株式会社国建.1995.「国営沖縄記念公園首里城地区計画・設計の記録【平成の復元】」,沖縄開発庁沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所,沖縄,pp.93-140.
- 43) 玉城政美.1976.「おもろ歌謡の周辺」(「鑑賞 日本古典文学 第 25 巻 南島文学」),株式会社角川書店,東京,pp.305-307.
- 44) 宮良當壯.1958.「やらざもり原義考」(琉球文学講座テキスト)(「宮良當壯全集 17」1982 年),第一書房,東京,pp.489-499.
- 45) 中国科学院植物研究所主編.2001.「中国高等植物図鑑 補編第一冊」,科学出版社,中国,pp.267.
- 46) 井上光貞.1983.「神話から歴史へ」,中央公論社,東京,pp.23-26.
- 47) 柳田國男.1985.「杖の成長した話」(復刻版『民族』第一巻上(第一号—第三号)),岩崎美術社,東京,p.83.
- 48) 湧上元雄.2000.「沖縄民俗文化論 祭祀・信仰・御嶽」,榕樹書林,沖縄,pp.304-307.
- 49) 新里孝和・芝正巳.2016b.「沖縄・うるま市・浜比嘉島シヌグ植物のナガバカニクサ論」.琉球大学農学部学術報告,63: 77-87.
- 50) 新里孝和.2014a.「沖縄,国頭村安田シヌグの祭祀植物ゴンズイ(Ⅰ)」.琉球大学農学部学術報告,61:55-66.
- 51) 新里孝和・芝正巳.2014b.「沖縄,国頭村安田シヌグの祭祀植物ゴンズイ(Ⅱ)」.琉球大学農学部学術報告,61:67-78,
- 52) 新里孝和・芝正巳. 2014c.「沖縄,国頭村奥シヌグの祭祀植物イヌガシ」.琉球大学農学部学術報告,61:79-86.
- 53) 新里孝和・芝 正巳.2017.「沖縄・伊平屋村田名のウンジャミ祭祀の祭祀植物としてのガジュマル」.琉球大学農学部学術報告,64: 55-63.
- 54) 新里孝和.2013.「沖縄シヌグ祭祀の植物観」.名護博物館紀要あじまあ・17,沖縄,pp.41-64.
- 55) 新里孝和・芝正巳.2016a.「沖縄、本部町具志堅シヌグ、亜対生葉序をもつ祭祀植物ヤブニッケイ」.琉球大学農学部学術報告,62:77-86.
- 56) 宮城定盛.1976.「国頭村安田の『シヌグ考』」.自費出版,沖縄,pp.74-78.
- 57) 初島住彦.1975.「琉球植物誌(追加・訂正版)」.沖縄生物教育研究会,沖縄,p.579.
- 58) 岩崎卓爾.1974.「あかまた祭ニ就テノ私見」.(「岩崎卓爾一卷全集」),伝統と現代社,東京, p.28.
- 59) ネフスキー・A・ニコライ.2005.「宮古方言ノート」,沖縄県平良市教育委員会,沖縄,p.138.
- 60) ネフスキー.1998.「宮古のフォークロア」(ニコライ・A・ネフスキー著,リヂア・グロムコフスカヤ編),砂子屋書房,東京,p.262-265.
- 61) 新里孝和・陳碧霞.2021.「琉球の古文書にみられる祭祀植物ダシチャ」,琉球大学農学部学術報告,68.(投稿中)
- 62) 石垣長健・新里孝和・新本光孝.2006.「西表島におけるイノシシ猟の伝統技術と実状」.琉球大学農学部学術報告,53:11-18.
- 63) 石垣長健・新里孝和・安里練雄・新本光孝・呉立潮.2007.「西表島における森林植物とイノシシ猟について」.九州森林研究 60: 1-4.
- 64) 新本光孝・新里孝和・安里練雄・石垣長健.2007.「亜熱帯沖縄における天然林の資源植物学的研究」(平成 15 年度～平成 18 年度科学研究費補助金),琉球大学熱帯生物圏研究センター,沖縄,pp.1～210.
- 65) 宮城信勇.2003.「石垣方言辞典 本文編」,沖縄タイムス社,沖縄,p.258.
- 66) 石垣博孝.2007.「(二)ニロー神」(石垣市史 各論編 民俗下),石垣市史編集委員会,沖縄,119-123.
- 67) 初島住彦・天野鉄夫.1994.「琉球植物目録」,沖縄生物学会,沖縄,p.215.
- 68) 天野鉄夫. 1979.「琉球列島植物方言集」,新星図書出版,沖縄,pp.85-86,111, 148-149,178-179, 198.
- 69) 牧野富太郎.1968.「新日本植物圖鑑」(第 17 刷),株式会社北隆館,東京,pp.1060,392,362.
- 70) 新垣則子・佐藤宣子・本永 清.2016.「第五章 沖縄の祭具—草冠」(沖縄県教育庁文化財課『沖縄県文化財調査報告書 151 集 沖縄の信仰用具に関する総合調査事業』),沖縄県教育委員会,沖縄,pp.220-226.
- 71) 本永清.2020.「草装神・木装神」(『沖縄文化』—沖縄文化協会装設 70 周年記念誌—抜粋), 沖縄,p.196.
- 72) 喜舎場永珣.1977.「赤マター神事に関する覚書」(「八重山民俗誌 上巻 民俗篇」),沖縄タイムス社,沖縄,p.281.
- 73) 平敷合治.1990.「沖縄の祭祀と信仰」,第一書房,東京,pp.391-403.
- 74) 新里孝和・陳碧霞.2021.「琉球の古文書にみられる祭祀植物アザカ」.琉球大学農学部学術報告,68.(投稿中)